

漢文読解辞典

角川小辞典

18



柳町達也



● 漢文読解の基礎から解説 ● 基本から総合的理解に及ぶ

● 古典を読むすべての人の必備書

● よく知られるやさしい文例を採った ● だれ

にも読めるよう口語訳と語釈をつけた ● 重要句法は一

覧表にまとめ、主要な句形を網羅した ● 訓読の歴史の変遷をはじめて説き

奥行きのある理解を可能にした ● 訓読上のあらゆる疑問を資料を示して解

明し、最良の読み方を示した ● 本書の基本法則の理解は、漢文読解力養成

の最短コース

角川書店

角川小辞典

18

文読解辞典



角川書店

解辞典

著者・柳町達也

発行者・角川春樹

印刷者・中内佐光

製本者・宮田四郎

発行所・角川書店

東京都文京区関口一の二十四の八
東京都文京区後楽二の二十三の七
東京都千代田区富士見二の十三の
振替口座 東京三一 一九五二〇八

初版・昭和五十三年四月二十日発行

装丁・代田 奨

製版印刷・暁印刷 製本・宮田製本

落丁本、乱丁本はお取替えいたします

0581-061800-0946(0)

©Printed in Japan

紹介

年也（やなぎまちたつや）明治四
丁茨城県に生まれる。昭和十一年
上舎専門学校卒。同十四年大東文
学高等科卒。漢学を専攻。

十四年滋賀県立膳所中学校教諭、
九年東京第二師範学校助教授とな
りついで東京学芸大学教授として
九年まで奉職。

東京学芸大学名誉教授の称号を受く。
その後、国学院大・大東文化大・都留
文科大・中央大・成城大・青学大に出
講。

著書『新漢文の徹底的研究』（三巻）

『細井平洲・広瀬淡窓集』『蒙求』『古

文真宝』『伝習録』『中江藤樹』

住所 184小金井市前原町三一三〇一四

は し が き

本書は漢文読解についてのごく基礎的な知識を、高校生や大学生にも十二分にわかっていただけたらいい。特に高校などの国語科教師にも他に類例を見ないものとして自信をもって活用していただけるようにとの観点に立って執筆したものである。さらに日本史、書道など一般古典に関係のあるものを読む方にも、幾分かご参考になればと思つて、公にする次第である。

本書は前後大別して、一覧表と本論とで構成した。一覧表は漢文読解のきめ手となる重要な句法の諸形式を可能なかぎり集めてある。見やすくするため説明は簡潔にしたので、詳しくは本論（第一、二、三章）の文例や解説をお読みいただきたい。

いわゆる漢文は、わが言語・文学・文化の各方面から学ばざるを得ないものである。国語は現代文が読めればよいというなら別だが、日本古典を学ぶ以上は、その背後にある漢文を知らずして何をか語らん。かつては漢文古典のあるものは、国文の古典よりもはるかによく読まれたのが実状である。

これがよかれあしかれ日本の文化を形づくるのに役だってきた。漢文を学ばざるを得ぬゆえんである。しかしその読解に当たつての大難関が二つある。一つは訓読の問題である。古く奈良・平安のころから鎌倉・室町・江戸にいたり、おりおりの口語などもはいつたりはしているが、いまだに遠いむかしの言葉が宝石のごとく黄金のごとくきらめくのを発見するとき、われらの胸は高鳴る。かくて明治になり、教科書ができるにしたがつて混乱期にはいり、ついに明治四十五年「句読・返点・添仮名・

読方法 漢文教授に関する調査報告（文部省）の官報が出て、一応はこれにのっとることとなった。

しかし統一というものには必ず無理がある。これが大正・昭和期にはいり、戦後になると一段と山積していった。文語文法に合わぬ言葉がある。また漢語・古語に対する理解の不十分さがみられる。しかも当事者はこれが漢文訓読だとしている。去る三十九年には高校側から「高校教科書訓読統一に関する要望書」が提出された。そこで大学側のその方面に関心のある方々四、五名を委員に挙げ、月例会を開き、年に一度「大学漢文教育研究会大会」で十年近くにわたって発表された。が、結論の出ぬまま今日にいたっている現状である。本書はこれに対する一案とも考え、公にする次第である。

も一つは漢文法である。この知識をしっかりと身につけ漢文に対せぬことには、正確な内容把握はできない。江戸に「用字格」「文語解」あり、中国にも「馬氏文通」を始め「古書虚字集釈」などすぐれた文法書があるが、いまわたしはそれらに導かれながら執筆した。「漢文法はそれほど必要はない」と思われがちであるが、それにはそれ相応の理由もあろう。が、それほどしっかりした文法書がわが国にはまだできていなかったことにもよろう。従来の文法書に百尺竿頭一步を進めることができうればこれに過ぐる喜びはない。余もとより浅学非才、誤解や誤読も多々あるであらう。幸いに大方の隔意のない率直なご批判、ご叱正を得ば幸いである。なお本書の成るに当たっては、元玉川大学教授瀬戸口武夫氏の少なからぬご指導を仰いだことを記し、感謝の意を表する次第である。

昭和五十三年正月

著者識

目次

はしがき	一
序 説	一七
重要句法の形式	二九
一 否定の形式	二九
二 使役の形式	四三
三 仮定の形式	四六
四 比較選択の形式	五三
五 受身の形式	六二
六 疑問の形式	六四
七 反語の形式	七七
八 詠嘆の形式	一二

目次

九	限定の形式	一一五
十	抑揚の形式	一二〇
十一	推量の形式	一二七
十二	願望の形式	一三一
十三	倒置の形式	一三五
十四	累加の形式	一四二
十五	疊用の形式	一四六
十六	再読文字	一四八
第一章	語位について	一五三
第一節	返らない漢文	一五三
1	何ガどうスル	一五三
2	何ガどうデアル	一五四
3	何ガ何デアル	一五五
第二節	返る漢文	一五六
1	「ヲ・ニ・ト」と送り仮名がついて返る	一五七
2	返読する特殊文字	一七一

(一) 不(弗・無・匪)・可(合・容)・勿(罔・毋・無・莫・靡)・見(被・為・所)・雖……………一七一

(二) 有(或)・無(亡・莫・勿・毋・罔・靡・末・非・微・蔑・沒)・多(饒)・

少(鮮・寡)・難・易・如(若)・罕……………一七七

(三) 所・攸・所以・所謂……………一九一

(四) 從(自・由・猶)・与(及)・每・比・為・能……………一九四

3 再說文字……………二〇四

未・宜・當・応・將(且・行・垂・向)・須・盍・猶(由)・使(令・遣)・

教・俾)・諸……………二〇四

4 於・乎・于・諸の文字があつて返る……………二三三

第二章 特殊な形式……………三七

第一節 否定の形式……………三七

1 部分否定……………三八

(一) 不^{ズシモ}ニ必^{ナラ}——と必^{ズレ}不^{ズレ}ニ——……………三八

(二) 不^{ズシモ}ニ必^{ナラ}——……………三八

(イ) 未^{イタズシモ}ニ必^{ナラ}——……………二五四

(ウ) 必^{ズレ}不^{ナラ}ニ——必^ズ無^{カラシ}ニ——必^{ズナカレ}勿^{ナカレ}ニ——……………二五九

(一)	不 ^ニ 復 ^タ ——と復 ^タ 不 ^ニ ——	二六三
(二)	不 ^ニ 多 ^ク ——と多 ^ク 不 ^ニ ——	二六六
(三)	不 ^ニ 独 ^リ ——と独 ^リ 不 ^ニ ——(独 ^リ 不 ^ニ ——乎 ^セ)	二六七
(四)	不 ^ニ 皆 ^ニ ——と皆 ^ニ 不 ^ニ ——	二七三
(五)	不 ^ニ 終 ^ニ ——と終 ^ニ 不 ^ニ ——	二七四
(六)	不 ^ニ 曾 ^テ ——(未 ^ダ 曾 ^テ ——)と曾 ^テ 不 ^ニ ——(曾 ^テ 無 ^シ ——・曾 ^テ 非 ^ニ ——)	二七七
(七)	不 ^ニ 常 ^ニ ——と常 ^ニ 不 ^ニ ——	二八一
(八)	不 ^ニ 兩 ^ニ ——不 ^ニ 俱 ^ニ ——と俱 ^ニ 不 ^ニ ——	二八八
(九)	不 ^ニ 敢 ^テ ——と敢 ^テ 不 ^ニ ——(乎 ^セ)	二九一
(十)	不 ^ニ 自 ^ラ ——と自 ^ラ 不 ^ニ ——	二九三
(十一)	不 ^ニ 甚 ^ニ ——と甚 ^ニ 不 ^ニ ——	二九四
(十二)	不 ^ニ 再 ^ビ ——(難 ^シ 再 ^ビ ——・不 ^ニ 重 ^ニ ——)と再 ^ビ 不 ^ニ ——	二九六
(十三)	不 ^ニ 唯 ^ニ ——と但 ^ニ 不 ^ニ ——	二九七
2 二重否定………		
(一)	非 ^レ 不 ^レ ——	二九九
(二)	無 ^シ ——不 ^ニ ——	三〇七
(三)	無 ^レ ——無 ^レ ——と無 ^レ ——	三〇九

(四)	不 ^{ンバ} ——不 ^ニ ——何 ^セ ——	三二〇
(五)	不 ^{ンバ} ——何 ^セ ——	三二五
	不 ^{ンバ} ——何 ^セ 以 ^{ヲもつテ} ——(乎 ^ン)	三二五

第二節 使役の形式……………三二六

(一)	使役の助字(使・令・遣・教・俾)を用いる場合……………三二六
-----	--------------------------------

(二)	文脈から判断して使役に読む場合……………三三〇
-----	-------------------------

第三節 仮定の形式……………三三二

(一)	仮定の助字を用いる場合……………三三二
-----	---------------------

(二)	仮定の助字を用いない場合……………三三三
-----	----------------------

第四節 比較選択の形式……………三三九

(一)	若・如・猶・譬如……………三三九
-----	------------------

(二)	A ^ハ 〔形容詞 ^シ 〕三於 ^ニ B ^ニ ……………三四〇
-----	---

(三)	A ^ハ 不 ^レ 如 ^レ B……………三四一
-----	--

(四)	何 ^イ 如 ^ニ ——……………三四三
-----	--

(五)	A ^ハ 莫 ^{ナシ} 〔形容詞 ^ニ 〕三於 ^ニ 〔名詞 ^ヲ 〕……………三四三
-----	--

(六)	A ^ハ 莫 ^{ナシ} 如 ^レ B……………三四四
-----	---

(七)	A ^ハ 孰 ^ハ 与 ^ニ B……………三四四
-----	--

(八)	A ^ハ 与 ^ニ B ^ニ 孰 ^ハ ——……………三四五
-----	--

(イ)	寧 ひび ——不 トセ （はまた無 カレ ）ニ——セ	三四五
(ロ)	与 ヨリ ニ（其 ハ ）——（也 ハ ）寧 わしろ ——セン	三四七
(ハ)	与 ヨリ ニ其 ハ ——（也 ハ ）不 ズ 若 レ ニ——ニ	三四七
(ニ）	与 ヨリ ニ其 ハ ——孰 コト 若 レ ニ——ニ	三四八
(三)	与 ヨリ ニ其 ハ ——也 ハ 無 わしろ 寧 ニ ——乎	三四九
(四)	与 ヨリ ニ（其 ハ ）——（也 ハ ）豈 あに 若 レ ニ——ニ	三四九
第五節 受身の形式		
(一)	動詞がそのまま受身となる場合	三五〇
(二)	ニ 於 ニ ——ニ	三五二
(三)	見 ミ レ——被 レ ニ	三五四
(四)	為 ニ レ——所 ニ ——ニ	三五七
第六節 疑問の形式		
(一)	スルヤいなヤ 否 イナヤ 否乎 ヤ 不 イナヤ 未 イマダシヤ	三六〇
(二)	邪 カ （抑 あへ ）——也 カ	三六二
(三)	疑問の終尾詞（乎・為・耶・与・歟・邪・哉・者・諸など）を用いる	三六四
(四)	文末につく「何如 いかん 」	三六九

(四) 疑問代名詞・疑問副詞を用いる場合……………三七四

第七節 反語の形式……………三九二

(一) 終尾詞(乎・哉・諸など)を用いる場合……………三九二

(二) 疑問副詞(安・何・如何・何以・豈・敢など)を用いる場合……………三九四

第八節 限定の形式……………四二二

(一) 唯(惟・但・直・徒・祇・只)や独(特)など……………四二二

(二) 終尾詞(也已・也已矣・已矣・耳・爾・爾也・云爾・而已矣・已・焉耳

矣)を用いる場合……………四二〇

第九節 抑揚の形式……………四三七

(一) 且スラナホ、況いはシヤ……乎フヤ……………四三七

(二) 且スラ、安いフアン……………四三八

(三) 況いはシヤ……………四三八

第十節 詠嘆の形式……………四三九

(一) 感嘆詞(于嗟・嗚呼・嗟乎・噫・噫・噫語・嗚呼噫語・惡・唉など)を用

いる場合……………四三九

(二) 終尾詞(哉・也哉・乎哉・矣哉・乎・矣・与・夫など)を用いる場合……………四四四

(三) 何ソ——也ニヤ(邪)・豈あた——邪カ・其ソレ——乎カナ(矣乎・与・也与・也歟)と

呼応する形の場合……………四五〇

四 已矣・已哉矣……………四五四

第三章 助字の解説……………四五五

焉……………四五五

(一) 「——焉」「——於此」の形……………四五六

(二) 「莫——焉」「莫——於此」の形……………四五八

(三) 「於」と同じように用いる……………四五九

四 「焉」は「之」と互用される……………四六〇

(四) 状態を表すときに用いる……………四六一

乎……………四六一

(一) 疑問……………四六一

(二) 状態を表すときに用いる……………四六五

(三) 呼びかけに用いる……………四六六

四 「於」と互用される……………四六六

爾……………四六七

(一) 断定……………四六七

(一)	「而已」と同じように用いる	四六七
(二)	「爾也」とつづくときがある	四六八
(三)	「云爾」とつづくときがある	四六九
(四)	状態を表すときに用いる	四七一
耳		四七二

(一)	断定	四七二
(二)	「矣」と同じように用いる	四七四
(三)	「耳矣」と同じように用いる	四七四
(四)	限定を表す	四七五

已		四七五
(一)	「ノミ」と読み、「……だ」の意	四七五
(二)	「已矣」となるときがある	四七六
(三)	「而已」となるときがある	四七七
(四)	「而已矣」となる	四七八
(五)	「也已」となる	四八〇
(六)	「也已矣」となる	四八二
夫		四八二

(一)	「カ・カナ・ヤ」と読み、詠嘆を表す	四八二
(二)	「矣夫」となる	四八四
(三)	「也夫」となる	四八六
猶		四八六
(一)	まだ	四八六
(二)	それでもまだ	四八七
(三)	すら・さえ	四八九
(四)	今からでも・まだ	四九〇
(五)	そんなことはありそうに思えぬのに・それでもますます	四九一
(六)	「可 ⁺ 止 ^ム 」の辞	四九一
(七)	「由」と通じ、「ヨリ」と読む	四九三
(八)	「ベシ」「宜シク……ベシ」「応ニ……ベシ」と読む	四九三
(九)	「(ナホ)……ゴトシ」と読む	四九四
(十)	「オナジ」と読む	四九五
尚		四九五
(一)	その上に	四九五
(二)	「コヒネガハクハ」と読む	四九六

由……………四九七

「(ナホ) ……ノゴトシ」と読む……………四九七

尤……………四九八

「猶」と音が通じて「ナホ」と読む……………四九八

苟……………四九九

(一) マコトニ……………四九九

(二) イヤシクモ……………五〇〇

(三) モシ……………五〇〇

誠……………五〇〇

モシ……………五〇〇

惡……………五〇一

(一) イヅクンゾ・ナンゾ……………五〇一

(二) イヅクニカ……………五〇一

(三) 「惡在」となる……………五〇一

(四) アア……………五〇一

則……………五〇二

(一)	……スルトキハ(則チ)……………	五〇三
(二)	「然 ^ス 則 ^バ 」となる……………	五〇四
(三)	……ハ……………	五〇五
(四)	「而」と同じに用いる……………	五〇六
(五)	「モ亦」の意のときがある……………	五〇八
(六)	そこで(ただちに)……………	五〇八
乃	……………	五〇九
(一)	そこで……………	五〇九
(二)	やっと(のことで)……………	五一〇
(三)	はじめて……………	五一一
(四)	ワヅカニ……………	五一一
(五)	しかるに・ところが・かえって……………	五二二
(六)	これ……………	五二三
(七)	ココニ……………	五二四
(八)	「ナンヂ」とも読む……………	五二四
即	……………	五二五
(一)	すぐに……………	五二五